



元寇前の高麗の状況

元寇への高麗軍の参加について、韓国国定教科書には次のように記載されている。

「元は日本を征伐するために軍艦の建造、兵器の供給、兵士の動員を高麗に強要した。」
まるで被害者だと言いたげな記述であるが、実際のところはどうであったのかを検証してみたい。

一.元寇前の高麗の状況

元に服属する前の高麗において実権を掌握していたのは武臣であり、高麗王はその傀儡に近い状態にあったが、高麗王は元に服属し、その軍事力を背景として、**1270年5月**、実権を奪い返し、武臣政権の軍事力の根幹であった三別抄に解散を命じた。これを不服とした三別抄は王族の承化侯温を「高麗王」に推戴し、珍島を根拠として蜂起したが、王は元軍の支援を受け、済州島においてこれを鎮圧した（1273年）。

元が日本に服属を勧める使節を派遣していたのはこの頃のことであり、日本がこれを黙殺し続けていたため、『元史』によれば、この頃高麗王世子諶が「元の皇帝に執拗に、東征して日本を属国にするよう勧めた」ため、遂にフビライ・ハーンは日本遠征を決定した。

ここまでで明らかになったのは、次の2点である。

- 1.三別抄の蜂起は、高麗王と武臣政権との権力闘争であって、元に対する抵抗戦などではなかった。
- 2.高麗王世子諶がフビライ・ハーンに執拗に日本侵攻を勧めた。

文永の役

二. 元寇への参加

『元史高麗伝』によれば、1) 高麗に兵を配置し、国書を以って属国とする、2) まず南宋を攻略し、降服した漢人を以って日本を攻略する、3) 高麗軍を以って日本を攻略する、という3案が検討され、モンゴル人の高官は兵力不足を懸念して南宋攻略を先にすべきと主張したが、高麗王世子諶の執拗な要請により容れられず、高麗からの日本侵攻が決定され、元軍22,000、高麗軍6,000、計28,000の兵力を以て日本へ侵攻した。

文永の役（1274年）における高麗軍の士気は高く、博多で日本側と交戦した後、『高麗史』によれば、高麗軍司令官金方慶が戦闘の継続を主張したのに対し、元軍司令官ヒンドゥは撤退を主張し、結局撤退することになったが、モンゴルの他国征服パターンとその兵力の少なさから、文永の役の目的は威力偵察と言われており、ヒンドゥの判断は当然だったと言える。

ここまでで明らかになったのは次の2点である。

3. 元的首脳の間では、まず南宋を攻略してから日本を攻める案が有力であったが、高麗王世子諶の執拗な要請により、高麗から日本へ侵攻すると決定された。

4. 文永の役における高麗軍の士気は高く、博多で日本軍と交戦した後、元軍が撤退を主張したのに対し、高麗軍はあくまで戦闘の継続を主張した。

日本再征準備

さて、文永の役後も元は日本に使節を派遣し続けていたが、日本側は使節を処刑するなどして、元の服属要求を無視し続けた。

そんな中、**1278年7月**、高麗王謹（忠烈王）が元に入朝してフビライ・ハーンに、「日本は一島夷のみ。険を恃みて庭せず。敢て王師に抗す。臣自ら念う。以って徳に報ずるなし。願わくは更に船を造り穀を積み、罪を声して討を致さん。」と申し出、1279年に南宋が崩壊すると、**1280年**、元は本格的日本侵攻のため、征収日本行中書省（征東行省）を設置し、高麗王謹を左丞相（長官）に、金方慶を管領高麗軍都元帥に任命した。

ここまでで明らかになったのは次の2点である。

5.高麗王謹（忠烈王）自らフビライ・ハーンに、元に従わない日本を「懲罰」すべく日本再征を申し出ている。

6.高麗王謹は、日本を征服するために設置された征収日本行中書省の長官に任命された、即ち日本侵攻の責任者となった。

弘安の役 1

日本遠征軍は東路軍4万（うち高麗軍1万）と江南軍（旧南宋軍を書主力とする10万）とに分れて日本に侵攻することとなり、まず、1281年4月18日、征東行省左丞相高麗王諶が合浦にて東路軍を閲兵し、5月3日、東路軍が日本へ侵攻すべく合浦から出発した。

5月21日、東路軍が対馬沖に達し、そのうちの管高麗国征日本軍万戸金周鼎率いる高麗軍が「世界村大明浦」に上陸して住民を手当たり次第に虐殺して回った。

対馬を屠った東路軍は続いて壱岐を制圧し、6月5日には早くも博多に達し、日本側と交戦したものの、戦況が思わしくないため、6月13日に壱岐に退却して江南軍の到着を待った。

ここまでで明らかになったのは次の2点。

7.高麗から出撃する東路軍を高麗王諶が征東行省左丞相として閲兵した。

8.東路軍のうち、万戸金周鼎指揮する高麗軍が対馬に上陸して住民を無差別に虐殺した。

弘安の役 2

6月25日、江南軍が合流予定日を過ぎても現れないため、征東行省右丞（次官）ヒンドゥ、同じく洪茶丘等が「今、南軍至らず。我が軍先に至りて数戦し、船は腐れ糧は尽く。其れ、將た如何せん。」と撤退を議したところ、金方慶が「聖旨を奉じて三月の糧をもたらず。今一月の糧尚お在り。南軍の来るを俟ち、合せて攻むれば、必ず之を滅ぼすべし。」と戦闘の継続を主張し、他の將軍たちが「敢て何も言わなかった」ため継戦となり、7月に入って、ようやく平戸において江南軍と合流したものの、有力な橋頭堡も確保できないまま海上を彷徨い、7月30日から閏7月1日にかけて発生した暴風雨によって壊滅的打撃を受けて撤退した。

ここまでで明らかになったのは次の1点である。

9.文永の役同様東路軍内部で撤退について議論したところ、ただ金方慶のみが戦闘の継続を主張した。

まとめ

三.まとめ

以上、元寇における高麗の関わりについて見てきたが、元寇を積極的に推進したのは元ではなく高麗、特に高麗王謹であり、高麗軍の士気も他に比べて（というより高麗軍の士気のみが）高かったことがわかる。故に韓国国定教科書の見解は誤りであり、高麗こそが元寇を主導したとさえいえる。

さて、元寇後も高麗には征東行省が引続き設置され、高麗王がその長官となり、元の勢力を背景として高麗の支配を続け、高麗の高官たちは競ってモンゴル風の名前を名乗り、風俗もモンゴル風が流行したが、元が明によって北方へ駆逐されると、1370年には明に服属した。しかし、明との関係を良好に保つことができず、親明派の将軍李成桂のクーデターにより、1392年に滅亡した。

最後に、高麗が日本侵攻に拘った理由を推測しておきたい。高麗は元の勢力を背景として、その王権の維持を図った。王権が不安定であったから、元の勢力、特に軍事力を必要としており、日本侵攻という目的があれば、有力な元軍を高麗に駐留させることができると考えたからと思われる。そうであれば、日本侵攻が行われなくなった後も、日本侵攻を目的として設置された征東行省が廃止されることもなく、歴代高麗王がその長官に就任し続けたことも理解できるのである。